

滋賀県の生物多様性

動物をめぐる問題

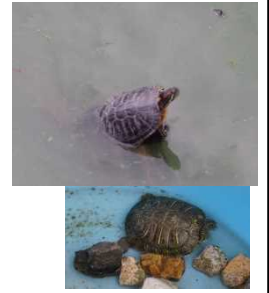
放逐

アライグマは1970年代のラスカルブームを受け、ペットとして、盛んに輸入されました。その後、飼育できなくなった個体が野外に放逐され、現在では、47都道府県全部で生息が確認されるまでになり、農作物被害、家屋侵入被害、人身被害などが発生しています。この問題はアライグマにかぎったものではなく、様々な動物におよびます。



ミシシippアカミミガメ

かつての夜店の人気ものも、今は在来のカメを駆逐する存在になってしまいました。現在、特定外来生物の指定に向けて法整備が進められています。



チャネルキャットフィッシュ

カナダ、アメリカ、メキシコの湖沼や河川に生息。1971年食用目的で日本に移入された。琵琶湖での生息が確認されています。



増加

ヌートリア

特に県南部でヌートリアの目撃が多くなっています。外来種そのものは被害をもたらすこともなく消えていくものもたくさんあります。ところが時として、人の手に負えなくなり、暮らしに甚大な被害をもたらすことがあります。ヌートリアの生育地周辺では、野菜やイモ類、稲の被害が確認されています。



ニホンジカ

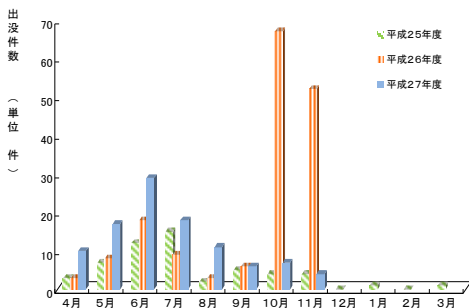
シカの増加による農作物への被害、森林植生の衰退など、シカの食害問題は大きな社会問題となっています。原因について、様々な議論がなされていますが、捕獲圧の減少、気候変動、里山環境の変化などが言われています。食害の影響は、農作物にとどまらず、ブナ帯でも影響は深刻です、天然記念物の伊吹山のお花畑も食害により大きく様子が変わりました。



樹皮食いによる立ち枯れ

出没

本来山地に生息の中心を持つ動物が、近年、よく里に出没し目撃されています。



ツキノワグマの目撃件数

原因については、餌不足（不作との相関がある）、森林環境の変化(人工林の増加)、生息数の増加などが考えられています。



カキの木に作られたクマ棚